

共同利用・共同研究課題「国境地域における日常的エスニシティ・宗教性：イラン・イラク・トルコのクルディスタンにおける比較事例研究」2024年度第1回研究会（通算第1回目）報告書

2024年7月16日（火）日本時間16時より、共同利用・共同研究課題「国境地域における日常的エスニシティ・宗教性：イラン・イラク・トルコのクルディスタンにおける比較事例研究」2024年度第1回研究会（通算第1回目）を開催した。研究会は、AA研セミナー室（301）とオンライン（Zoom）でのハイブリット形式で、使用言語は英語で開催した。

参加者は、共同研究者では、松永泰行（東京外国語大学）、後藤絵美（AA研）、Mostafa KHALILI（京都大学）、酒井啓子（千葉大学）、吉岡明子（日本エネルギー経済研究所）、Vakkas COLAK（東京外国語大学）、Sohrab AHMADIAN（東京外国語大学）、Mehmet Mashuq KURT（ロンドン大学）、Farhad BAYANI（イラン高等教育省社会文化研究所）、オブザーバーとして、Rawia Altaweel（千葉大学）、Ian KARUSIGARIRA（東京外国語大学）、および Sofia HUERTA NUNES, Juliana BELINO, Shima WAKED, Mariam HESHAM（以上4名、東京外国語大学総合国際学研究科博士前後期課程）、が参加した。

報告者と報告タイトルは以下の通り。

- (1) Yasuyuki Matsunaga, “Critical Introduction to Analytical Approaches to Boundary Dynamics”
- (2) Mostafa Khalili, “Contentious Borderwork in Kurdistan: Dynamics of Cross-Border Kurdish Identity in the Tri-Border Region of Iran, Iraq, and Turkey”

松永報告は、本共同利用・共同研究課題で目指す研究内容とその学問的な特徴を、理論的・方法論的アプローチの点から明らかにするためのものであり、報告は配布された“A Project Manifesto for and An Analytical Introduction to Dynamics of Social Boundaries”と題されたメモに基づいて行われた。Fredrik Barth, Charles Tilly 等の既存研究を踏まえ、boundary process 分析と社会ネットワーク分析の双方を互恵的な形で活用することが提議された。

Khalili 報告は、松永報告の内容を受けて、それを ethnicity 研究の側面において、どう実施に移すかについて、これまでの研究の実践と成果を踏まえ提示するものであった。

これらの報告を受けて、全体討議を行い、研究の目的等を確認し、解散した。

（報告：松永泰行）